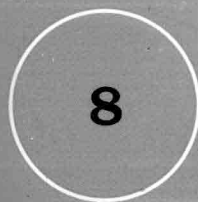




潮出版社



# 平林たい子全集

---

## 平林たい子全集 8

---

昭和52年 9月20日 印刷

昭和52年 9月25日 発行

著者・平 林 た い 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・島 津 矩 久

発行所・株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋 3-1-3

電話 東京(03)230-0741(販売部)

230-0781(編集部)

郵便番号 102

振替 東京 5-61090

---

印刷 第一印刷株式会社 製本 株式会社 鈴木製本所

---

© 1977 Shinko Teshirogi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えます

## 目次

うつむく女……………7

男のような女……………150

女二人……………159

苦痛という快樂……………177

娘の母……………187

パリ祭……………196

遺伝……………207

姐妃のお百……………215

真昼の妻……………286

花井お梅……………305

|          |     |
|----------|-----|
| 女声合唱     | 351 |
| 見合結婚     | 367 |
| 死の商人     | 376 |
| 犬をつれた女   | 383 |
| 透明人間     | 394 |
| 匿名氏      | 400 |
| 解説・河野多恵子 | 411 |



平林たい子全集

8





## うつむく女

## 正月の客

夫の順一の、会社からの帰宅はずっといままでも早いとはいえなかった。がこの一ヶ月さらにおそくなった。きょうも、門の鈴がなって、順一特有の重い靴音がひびいたとき珠子が時計を見たら、八時十分になっていた。

しかし、ともあれ一日離れていた夫の顔を見る満足は理屈ではない。二時間近く火鉢のそばにうなだれて鉄びんの吹き出す蒸気の白い羽毛を見つめていたみじめはその瞬間かるく吹きはらわれた。

珠子は、髪のカールにそつと手を当てて立ち上りざま、前掛をうしろ手に外して玄関に走って行った。

「おかえりなさいまし」

「ただいま。きょうはきのうより早いだろう。何時かな」

と順一がいうところをみると、彼も、帰宅時間を気にしていることがわかる。

「八時打ちました」

珠子はおろおろ言って、待ち惚けていた恨みがひびいてはいらないかと、自分の言葉の余韻に自分で耳をすます。「稲子達がきょう引越したもんだから、そのアパートをえりにちよつと覗いて来たんですよ。ところがひどい室でね、アパートといったって、隣室との間が襖で、男の人が住んでいるんだ。あんな室をさがすんだから、若い娘には任せておかれぬ。また用事がふえちゃってね」

「まあ、そうですか。はじめからこちらで探してあげればようございましたね」

珠子は、歪んだ表情をかくすため、下をむきながら、やうと咽喉から押し出すような声で言った。

算盤塾をして、稲子と麦子の姉妹を育て上げた健気な未亡人袖子は、順一の従姉に当たっていた。本来順一は、やさしい思いやりのある性質で、袖子が健在だった頃もかげになり、日向になり、その算盤塾のために看板のペンキ塗までして助けて来たものだ。

が、その塾が、袖子の病気のために閉鎖されて、母子三人の生活行路がけわしくなりだすと、順一の一家に対する憐愍は、とめどない激しさで三人に注ぎかけた。結婚七年間に貯めた虎の子の十五万円の貯金さえ珠子にこわってあらかたの十万円を一家に貸し出してしまった。歯をくいしばって、堪えられるだけ堪えて来たさすがの珠子も愚痴をいうようになった。

「でも、あまりそうなすつたら、却ってあの方の自立心が

「なくなりはありません？ 稲子さんだって、いまはもう月給とりですもの、会社にたのんだら、少しは融通できると思いますわ」

すると順一は痛い所を突かれたように目をしばたいた。

「僕はこうしたいんだ。こうすれば幸福なんだからしばらく見ていてくれないかなあ、何か変な意味じゃないからね。貴女は心配しなくてもいい。玉川一家は可哀そうですよ」

順一にそう言われると、珠子は、はげしく突掛りたい不満のはけ所を失って、自分の心の奥の壺に、その悲しみを溜めておく他ない。

それにしても人間の隣人愛というものはあんなに境のない広大なものだろうか。珠子には信じられなかった。彼をあんなに玉川一家に向けて駆り立てるものが何だが珠子にはわかってゐるがそれは言えない。珠子は、いつぞや、しみじみと、退職判事である実家の父の俊作にきいてみたことがある。

「お父さま、あなたは男だから、うちの伊田の気持がおわかりになるでしょう。いくら親類だからって、男が、あんなによその家族に親切にするの普通じゃありませんわね。この頃のあのひとのやり方ではとても我慢できませんのよ。どうお思ひになりますか？」

「さあねえ、あれがああ男の身上なんだから、まあ見ておいで。薄情にするのを見るよりや、いいだろうよ」

俊作は事勿れ主義の男だから、常識的なことを言って、

娘の珠子を慰めておいた。が、彼は珠子がかえってから、妻の磯江に、

「何か、あの男は、珠子に不満でもあるのかね。本来孤独なたちではあるが。大分本をよむようだから、思想上の煩悶でもあるのかと、こないだ逢ったとき謎をかけてみたが、そうでもないらしい」

妻の磯江はしつかりした現実的な女だった。

「あれは順一が姉娘の稲子に誘惑されているのですよ。わたしには前からわかっていました。珠子にそれを言うのが可哀そうだから上手に機嫌をとらないと、夫婦の倦怠期は恐いものだとか、それとなく言っておきましたけれどね。可哀そうなものです。もう少し気をつけてやりましょう」

こんなことを親子がはなし合っていた矢先に、稲子と麦子の母親の袖子は、持病の腎臓病が悪化して、順一の友人が院長をしている病院で亡くなってしまった。

この前後、順一が玉川一家のためにした奔走は、言語に絶したものであった。家の客座布団はもち出す。卓も椅子も食器もリヤカーを雇ってはこぶ。自身は終電車でかえって来て、朝七時に起きて玉川家に行く。

珠子は、ひとり居の茶の間でときどき鏡をのぞき込んでポロリポロリと涙をながした。が順一の熱のあげ方が普通でないのかえって空恐しくて、その勢に逆らうようなことはますます言えなくなつた。

しかし袖子の葬送も終って、姉娘の稲子はしばらく休ん

でいた会社づとめに、妹は大学に、もとの生活が戻つて来た。ひる間行つてもいないため、順一は、夜の時間しか姉妹を訪ねることがなくなった。珠子はほつとした。しかし、それも束の間、姉妹が家をたんでアパートに移ることにきまると、いろいろな助言の必要からまた殆ど毎晩姉妹の顔を見てくるとしか思えない。珠子がいくらか取戻した快活はまた失われた。

「御飯まだですわね」

珠子は、夫のうしろに回つて外套を受けとりながら、こわごわとたずねた。母の注意もあつて、この頃は、女人めいた料理の本をかつて、フランス料理のまね事をときどき試みる。きょうのは、季節ものの牡蠣を入れたコキールだった。

「まだですよ。腹がペコペコさ」

「じゃあ、すぐ……ちょっと待つて下さいね」

彼女はしいて気軽に言つて、卓にかけてあつた布巾をのける。それから、台所にかけて込んで天火のガスを大きくする。もう、いくどもかけた外したりしたために、二つの皿のコキールの牡蠣は醜くちこんで衣は黒くこげていた。

「石上君はもう夕飯すんだの」

石上は、二階に住ませてある順一の後輩である。彼は、ある地方の建築会社の技師で、東京で請負つた仕事を完成するために、すでに二年ちかく伊田家に寄宿していた。

「石上さんは、一人でききに召上りました。もうさつき散

歩にいらしたようですわ」

今を何時だと思つていふというせい一杯の抗議をその言葉に託したつもりだったが、臆病でひかえ目な珠子の口調には、非難めいたアクセントは全然ひびいていなかった。

「残念だ。彼に相談したいことがあつたんだがなあ。またパチンコで十一時ころまでかえらないだろうね」

「なんの御相談？」

「いやあのねえ、玉川姉妹のかりた室の襖を、こちらの費用で壁にしたらどれだけかかるか鑑定して貰おうと思つたのですよ」

またしてもあの姉妹の話かと、珠子はうんざりして、つい言葉少なになつてしまふ。

順一は、皿にのつたあついコキールをスプーンですくいながら、

「世間には、貪欲な間貸人もいるもんだねえ。古ぼけたバラック建築の六畳で、権利金が三万円に室代が五千円だつてさ。それにくらべると家の石上なんぞ、ずい分得をしているね」

ああ、もう沢山。しかし、珠子は、悲しみに歪みながら頬をしいてねじ曲げるように笑顔にふりむけて、

「石上さんのようなおもしろい方なら、二千元でも高い位よ。ときどきセメントももつてきて下さるし、国から乾鮎もとつて下さるし……」

と心にもない言葉をつらねて、むなしく調子を合わせて

いる。そのとき、門につけた鈴がなった。

「石上君だな」

順一の心は、やっぱり、さっきの、玉川姉妹のアパートの襖のことでいっぱいになっていた。彼は、食後のお茶もろくにのまずに立ち上って、自分から出て行って二階にある石上を茶の間に呼び込もうとした。

しかし、玄關の硝子戸をあけて入って来たのは、大丸鬚に、シールの長コートをだらりときた珠子の従姉の小夜子だった。

「今晚は。こんなにおそく御免なさい」

「おや、いらっしやい。さあどうぞ。家ではまだ夕飯が終ったばかりのところですよ。ちっともおそくありませんよ」

順一は愛想よく言つて、珠子をよぶ。珠子はその前から小夜子の声をききつけて、ぬれた手を前掛でふきふき出て来るところだった。

「あらまあ！ いらっしやい」

「おっほほ」

珠子は、まず、小夜子の大丸鬚に讃嘆の声をあげた。

「よく似合うわねえ。結いなれていらっしやるから。でも髪結いさん近くにありません？」

「品川まで行くの。大変よ。半日待ってやっと結んでもらっていまかえりなの。おやじさんがひとりで待ってるけれど、かまやしないわ」

珠子は、順一の愚痴を腹いっぱい訴えようと思ったから、

わざと小夜子を茶の間から遠い応接間につれて行った。

「小夜子さんはよく小まめに、日本髪に結うわね。上背もあるし、似合うからお好きなんでしょう」

「ほほほ、大違い。こんな髪、手入れが大変だから、どちらかといえは私きらいよ。だけれども、おやじさんの注文だから、仕方がないのよ」

「へえ！」

「貴女だから打明けるけれど、うちのおやじさんは、私を自分の寝間につれて行こうと思うときには、必ず髪を結つてこいつて命令するの。きょうも忙しいけれど仕方なしに行つて来たわ。だから、少し暇をぬすんでやるの」

珠子は、小夜子の露骨な打明け話に少なからずれたけれども、そんなこともあるのか、と感心していた。

「じゃあ、こんどから、貴女が鬚に結つてらしたら、あれだな、って思うわ。木下さんて、変つた嗜好をもつてらっしやるのねえ」

「ふん」

小夜子は木下がほめられると冷淡に鼻であしらつて、

「ときにどう、やっぱり？」

と間接的にたずねるのは、前にも二人で喋り合ったことのある順一の玉川一家への傾倒についてである。

「ちっとも変らないの。むしろひどくなった位。小夜子さん、どうお思ひになる？ 鑑定して頂戴よ。順一と稲子さんとはどの程度の間柄なんでしょう」

「勿論だわ」

「勿論で——ないという意味？ あるという意味？」

「まあある方でしょうね。遠くて近きは——よ。いくら女がつつましくしていたって男が承知しないから結局そうなるわ」

「そうかしら……」

いろいろな疑雲はわだかまっていたけれどもまさか、そこまでは行っていない、というのが珠子の実際の気持だった。だから、珠子は、小夜子の断定的なことばに自分でもわかる程、すうと血の氣を失って、唇をわなわなさせながら急に、左手の結婚指輪を氣ぜわしく、ぐるぐる回し出した。

「もしそうだとすると、堪らない。ああ、堪らない。どうすればいいのかしら」

小夜子は、氣のよい善良さの輝いている目つきで下を向いた珠子のいらいらした顔をのぞき上げて、

「でもそんなこと大したことじゃないわ。我慢するのよ。」

いまさら出るの引込むのといったって、お父さんやお母さんが悲しがるだけだし、二度目となればもっといい相手なんか、なかなかありやしないのよ」

「羨しいわねえ、小夜子さんの徹底ぶりにはいつも感心するわ」

が珠子は、その言葉で小夜子が、木下のような不潔な男性と、大した事もなく中年を迎えようとしている心境が手

にとるようにわかる氣がして、むしろ小夜子が氣の毒である。自分だったら、とても我慢できないで逃げ出したに違いない。

小夜子の夫の木下は、広義の意味での画家である。四科会成立のときの記録を見ると、れっきとした洋画家として発起人の一人になっている。が、何十年のことは知らず、ここ十年来、ちゃんとした画をかけたことは絶無である。

戦争中には、満州国皇帝の肖像だとか、敵前上陸の殺ばつたる光景をかいて善良な村や町で米味噌と交換した。戦後にはガラリーとむきを変えて衝立に表装する春駒の女姿とか、あぶな絵のイミテーションの膝を立てた女の趣向などを日本画風にまねた。それが案外うけて、目の蒼い兵隊さんのお国みやげなどに羽根が生えてさばけるようになってから、一步一步深味に入って行った。今では、仕事の殆ど半分は丁髷の男と櫛笄の女のあられもない姿態の古典めいた絵だった。

「ちょっと失礼。待っててね。もっと御相談したいことがあるんだから」

珠子は、こんなやりとりの間にも、茶の間に一人でいる夫に氣をつかっていた。彼女はせわしくスカートの裾を揺すぶって、よくふいた廊下に走り出す。

そのとき、二階に住んでいる石上が、こんどはほんとに散歩からかえって来た。

「おかえりなさい。——」

と声をかけると、石上は、丸いきれいな目で珠子を正面から見て、

「今晚という今晚は、玉を千個とつちやっただです。煙草ばかりでも気がきかないから、おみやげは、ざっとこの位——」

彼は片手にかかえていたむき出しのコンビーフやビスケットや味の素を得意そうに玄關の板の間に並べる。

「あらー、でもこんなにとったら、お店がかわいそうじゃありません？」

珠子は、快活な声を出していたが、気持はやっぱり、茶の間の夫の方に向いていた。もしかしたら、そのわざとらしい声も石上がかえって来たということを夫に知らせるための作爲だったかも知れない。ほんとに珠子の高い声がきこえたと見えて順一が顔を出して、石上を茶の間に招いた。これでまた、当分の間、順一と石上との間には、玉川姉妹のかりたアパートの壁の話が取交わされる筈である。

珠子はうんざりして、石上が、くれるつもりでそこに置いたパチンコの分捕品を床からひろい上げて、茶の間に入って行く。

「またパチンコかね。君には人間を相手にする気持がないらしいね。現代青年にしては全くめずらしくできてるよ」  
「ニヒリストというんでしょね。きょうも、パチンコの玉の行方を見つめながら考えたんですが、どうも僕には、流行の平和運動まで裏が透けて見えて、夢中になる気にな

らないんです。僕にとつて、唯一の實在は、パチンコの鉛いろの玉とその運動だけです」

「實在か——」

順一には、そんな言葉も耳なれない。順一は、人間と人間との関係の中に、甘い可能性の夢を抱いて、この友人のためにとか、あの親類のためにとかいう口実で、忙しく無償に動き回るのが人生至高の奉仕だと考えている。玉川一家の虜になつてからは、彼の博愛心は、その一家の人々の上にだけ、だんだんせまく限られて行くようになったけれども。

「ときに——」

順一は珠子が入れかえた急須をとつて、鉄びんの湯を注ぐ。それ、いまから例の話題に変わるのだ、と珠子は、もうきくのもうんざりという面持で、次の言葉から逃げるように、廊下に出る。

応接間の小夜子は、しっとりした艶やかな鬘の首を重そうに傾けて、長い襟足をのぞかせながら正月すぎの霜がれた庭の暗がりをガラス越しに見ていた。じつと一点を見つめて、またたきもせず突立っている姿にはなにか、無気味な凄味が体中から発散している。彼女は、珠子が扉をあけると、ぎょっとしたようにふり向いた。

「珠子さん、いまのひと二階にいる技師さんでしょう」

「そうよ」

「素敵な人ね。とてもすばらしいわ」

「そんなにほめたってだめよ」

珠子は、笑い出した。男性と見ると、特殊な官能がうごくらしい女ざかりの小夜子の言うことには、つねづねおそれをなしていた。

「あら貴女のためにほめて上げるのよ」

「私のためにですって——私はそんなにひらけていないわ」

「あんなこといつてるわ。まあいい。それならそれで。その方が仕合わせかも知れないわ」

小夜子は、何か心に泛ぶらしい感情とないまぜた独言を言つて「まあね、男なんて、知つてみれば可哀そうなだけで、何の変哲もないから、貴女のように考えてる方が結局無事かも知れないわね」

珠子はだまつていた。と、窓外を見てうそぶいていた小夜子が、突然珠子の手を痛いほど握つた。

「珠子さん、わたし木下と別れようかしら」

「あら、どうして。突然そんなこと言つたってわからないわ」

しかし、その場のさし迫つた感情はさつきからの珠子の悲哀を一度にどつとさそい出した。

「いま、私に夫と別れるなど言つたのは誰？ いけないわ。いけないわ」

珠子は涙をばらばら振りはらつて、小夜子の手をばたばた打っていた。

「だって、別れたいんだもの、仕方がないわ」

小夜子も、珠子の涙に誘われて、意味もなく涙をためながら、笑っている。

「きょうは何だか貴女の顔は気味がわるいのよ。御免なさい。きょうはかえつて。いつかまた、もっと澄んだ気持ちのときにお話するわ」

小夜子がかえつてしまつと、珠子は、夫達が喋っている茶の間には行かず、セーターの袖をめくつて風呂におりて、さっきたいておいた湯加減を見た。ついでに、冷たい水で手を洗い、興奮をしずめるためにいつのまにか「ううううう……」と鼻をならして無意味な韻律をつけていた。

茶の間の話は、ききたくない話題の峠をこえたと見えて政府の政策批判に飛躍している。

「いい政治をやれば、僕は誰でもOKですね。鳩山内閣反対とか、吉田内閣反対という言葉がマンネリ化しているのを、僕は最も憎みますよ。マンネリズムには感動がないですもの」

「僕は、いつもいうように鳩山内閣には、消極的だけれども賛成なんだ。社会党にどんな人物がいます？ 彼等は反対派だから引立つて見えているけれども、政治の場に立たせたら、見劣りがして始末がつかないだろうと思うんだ」

珠子は、手をふきながら、二人の政治論をしばらくきいていた。彼女は、順一には相談せずに、この前の選挙には社会党にいられていた。こんなことも二人はちがうのか、と



夫の言い分に耳をすます。

彼女は、尚二人の話には入りたくない気持でうろうろしていたが、二階の石上の室の火鉢の火種がなくなっているしなにかと、あがって行った。ほのかに男性の体臭が匂っている六畳の室には、出身大学の校旗が壁にとめてあり、ポートのチャンピオンだった記念の銀カップが二つ、本棚の上にのっている。あまり荷物がないのは、当座の東京滞在だからで、国の方の自宅には、ほかに大カップが五つもあると言っていた。

珠子は室の真中に坐って、石上がいつも坐る布団の上に膝をついて、火鉢の中の赤い火種を一つづつはさんであつめる。彼の座布団の上に自分の体を置いてみたのは、きょうがはじめてである。

彼がすって、灰の中に突込んだ煙草の林。彼が切る爪剪り、彼の使う万年筆。珠子は、いままでこの室で気がつかなかった一つ一つの石上用の品物が、急に目前に生れ出たように、しげしげと見る。

小夜子が折紙をつけてから、急にそう思うのは、愚かな話だが、石上は、たしかに魅力のある明るい青年である。

## ある夜

丸鬚の小夜子が郊外駅でおりたとき、改札の柵外の人

ごみに、赤い頬をした娘のしづ子が見えたような気がした。

「おや、あの子は、今晚立川に泊るといつていたのにどうしたんだろう」

立川には、小夜子の姉の久代のかたずいた島津ベーカーリがある。戦後の食糧難時代に久代の奮闘で基礎が築かれて、いまでは五つ六つの学校給食を握っている大きなパン屋になっていた。

しづ子は、通学している高等学校が立川にある関係から、父母にことわって、ときどき、子のない島津家に泊ることがある。

小夜子が階段を降りきって、改札で切符を渡しながら、も一度見ると、通学の黒いトッパをきた彼女が、毛糸の赤い手袋の手を振って小夜子に微笑みかけていた。

「ずい分待ったでしょう。この寒いのに、迎えになぞ来なくたってよかったのよ。どのぐらい待ったの」

「そんなじゃありません。ちょうど、お父さんの用事でその支那料理屋に注文に來たから、ついでに來てみたのよ」

「へえ、誰かお客様？」

「ええ、佐渡さんと、井上さんと、今西さんです」

それで、しづ子が小夜子の帰宅時間も知らずに迎えに出ているわけがわかった。

「それは大変だわ。またお酒ね」